

---

**【 夢見るカゴの鳥 】 唄う鳥・嘆く竜シリーズ (シュテラ編)**

行之泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【 夢見るカゴの鳥 】【 唄う鳥・嘆く竜シリーズ (シュテラ編)】

### 【Nコード】

N6568P

### 【作者名】

行之泉

### 【あらすじ】

魔法がつかえてドラゴンの居る、中世ヨーロッパ調世界。  
主人公は幼い少女シュテラ。

## 前編

窓から外を見ると、青々とした草原が見える。

草原の向こう側には、なだらかな丘と深い緑で包まれた山々。

心を飛ばし、見える更に遠くまで意識を伸ばす。

丹念に探したが、伸ばした先に知った感覚はない。

… やっぱり、まだこの近くには居ないか。

… でも…

遙か遠くまで繋がる空を見て、思いを馳せる。

… この先にも世界は広がっている。

… どこまでも広い世界が存在している。

教えてくれたのは、優しいおじさまだった。

幾ら眺めていても飽きない風景。

… いつか私は旅に出て、広い世界を旅したいな。

今年十歳になる少女は未来への夢を胸に、窓にかじりついて風景を眺めていた。

右手の甲の中央には真つ赤な宝石がはまっている。

飽くことなく眺めていると、爪先立ちの足先がじんじんと疲れて

くる。窓枠に縋りついているのだが、腕力もない彼女には腕だけ

で体重を支えるのは不可能だ。

爪先立ちの足もそろそろ限界を向えそうだ。

… せっかく、誰にも見つかっていないのに。

「もうダメ」

小さくため息をつき、窓枠から手を離すと椅子に踵をつける。

ウェーブがかった長い髪がフワリと舞った。

「記録更新中ね。シュテラ。一時間経っているわよ」

部屋の中を飛んでいた小さな竜が、シュテラと呼んだ少女の近くまで飛行して、翼を広げたまま静止する。

全身を硬い鱗で覆われた、首が長く翼を持つ四足の生き物。口元

から覗く牙は鋭いが、赤く輝く瞳は優しい色を帯びシュテラを見つめる。

「それって、私が大きくなっているってことかな？体力がついたって事かな？ローザ」

シュテラは椅子に座り、スカートのしわを伸ばすと膝を両手で軽く叩き竜を招きよせる。

「そうね。体は少し成長して体力も上がっているわね。それよりも術の力は格段に上がっているわ。誰一人この場所に居るとは気がついていないわよ。神殿の中では貴方が居ないと言って大騒ぎになっているのに…これは胸を張ってもいい事ね」

ローザと呼ばれた竜はそう答えると、翼を羽ばたかせ、当然のようにシュテラの膝に柔らかく着地した。

羽をたたみ居座る姿勢を取ると、シュテラはローザの背中を撫でる。ローザは目を細めて気持ち良さそうな顔をした。

「護衛のおじさん達から逃れる術なんて…ここでしか使わないし。褒められても何だか複雑」

少女はその魂に強力な魔力を有し、神殿の奥で大切に護られ、崇められている存在だ。

何処かで封印されている強大な力を持ったドラゴンと契約を交わし、魂の繋がりを持つ一族の末裔。最初の契約者が歌でドラゴンを癒した事から『唄う鳥』とこの国では呼ばれている。

その力を受け継ぐのは血族の中で、ただ一人。

時の『唄う鳥』から印が消えた時に、その子供に力が移ったと判る。印は真つ赤な宝石。

その体の何処かに赤く輝く宝石のような結晶が埋め込まれた状態で生まれてくる。

シュテラは右手の甲に現れた。誰が見ても判る『唄う鳥』の印。

シュテラはこの神殿の中で生まれ、神殿の中で生きてきた。

魔術の力を借りて精神だけ他の場所に飛ばす事は経験したが、実際には神殿の外には一度も出た事がなかった。

ずっと、この神殿で生きてきた。ずっと護られ、その行動はいつも誰かに見張られている。

だから、自分の居場所が判らないような術を使って息抜きをしている。

望んだことが軽んじられる事はないが、本人の意思が通ることもあれば通らないこともある。

塔の窓から外を眺めるといっただけで言えば、申し出れば叶えられる類のものだ。

だが、物思いの邪魔をされず、心を許した者だけを付き添わせるという事が叶わない。

定められた場所以外には、厳つく眼光の鋭い騎士を数人引き連れて歩かなければならない。それがシュテラは嫌だった。

彼らと一緒にいると嫌な気分が胸の中で広がっていく。笑いかけると笑い返してくれるが、その瞬間に彼らの中で苦い思いが広がるのを少女は感じるのだ。

彼らの父はそれぞれ少女の父を護る際に亡くなったと聞いた。代々この仕事についている家系らしい。

シュテラの父は大きな力を有しながら不安定で、度々暴走し周囲の者を巻き込んだと聞かされた。

『唄う鳥』を守護する存在である『調停者』という役割の人も、父の代で三人代わったと聞いている。

『調停者』は国の中で一番の術者で『唄う鳥』に何かあった時に命を賭して事にあたる。三人代わったという事は三人の人が命を落としたという事だ。それだけの混乱がこの神殿で起こった。

シュテラの知る父親は体が弱く陰のある人ではあったが、いつも控えめな笑顔を浮かべている人で、そんな恐ろしい部分があるとはとても思えなかった。

だから護衛の任にあたる彼らが、その力と役目を受け継いだ彼女に対して、複雑な思いを抱いていても仕方ない。

ただ、その感情に触れる度にシュテラはどう反応しているのか判

らなくなる。年齢は幼いが幼さに不釣り合いな知識と経験はある。それが彼女の考え方を年齢よりはずっと大人にしていた。

誰もシュテラが進む道を示してくれない。それは彼女には不満だった。

以前は頻繁に起こっていた武力衝突も今はなく、外交は上手いっっている。

先代が外交の場で力を見せた事がこの国に有利に働いており、当面は力を使う必要は無くなったと今の『調停者』からは告げられた。力を磨き保持して、次の代に役目を受け継げば良い。そんな風に言っていた。

強すぎる力を持つ事の意味が彼女の代では薄れてしまい、その重みをシュテラは持て余している。

幼いながら自分で考え自分で行動しなければならなくなったという事だ。

導いてくれる大人を彼女はひとりしか思いつかない。それも問題だった。

鱗で覆われた背中をゆっくりと撫でる。

ローザが気持ちよく感じているのが、シュテラには判る。

彼女とは生まれる前から繋がっていて、ローザはシュテラに常人には無い生命力と魔力を与えている。望めば記憶や精神も伝える事が出来る。

だがシュテラがそれを望む事はあまり無かった。子供である事のジレンマの方が大きくて、早く大人になりたいと思うばかりだ。

「長い旅をしても大丈夫かな…？」

独り言を呟くようにシュテラが言うと、ローザは笑いながらシュテラの心を見透かすように応えた。

「それは。まだまだだね。こんな子供の体力じゃ大人の足手まといになるわね」

「……………やっぱり」

実際に心を読むまでもない。

シュテラには家族同然だと思っている男性がいる。心を素直に出せて何でも話せる存在はローザ以外には彼だけだ。それだけシュテラの信頼は篤い。

だが彼女が幼い頃に旅に出て以来、時々帰って来るが、すぐに次の旅に出てしまう。

「ねえ。ローザ。今度はいつ、おじさまは戻ってくるかしら？」

彼と過ごす時間がシュテラにとって素の自分に戻れる時なのだ。シュテラはずっと彼が帰ってくるのを、首を長くして待っていた。

最初に旅に出た時の事をシュテラは思い出した。「長いかくれんぼをしよう」そう言った。彼は「僕が何処に行ったのか探してごらん。君の術で…答え合わせは帰ってきた時にしよう」と言って、笑って旅立った。

父のそばにずっといた彼。シュテラが生まれてから五歳の時まで、まるで家族のように接してくれた。シュテラが生まれてから、父は病の床に就き、口数も少なかった。

だから、主に接してくれたのは彼という事になる。

彼は家族同然というより、シュテラの中では家族そのものだ。

父が亡くなり彼が神殿を去るまで、彼は何があってもシュテラとも一緒だと思っていた。

父が逝き、彼が去り、シュテラの世界は変わった。

…仕方ないと判っていても、おじさまと過ごす時間だけは諦められない。

彼と一緒に旅に出る事がシュテラの夢だ。

叶わないとは判っていても、夢見ずにはいられない。

「そう言うと思ってたわ…もう来ているわよ。神殿の中に居る」

「え？こんな突然。全然、判らなかった」

「そうね。私もさつきまで、気がつかなかった。あの子も力を上げたわね」

「どうして、それを早く言ってくれないのよ。大変！」

シュテラは慌ててローザを膝に乗せたまま、椅子から降り立った。

シュテラの行動は予測がついていたのか、動いた途端にローザは飛び立ち、シュテラの周囲を旋回する。

「乱暴ね…『唄う鳥』なら、もっと淑やかにしなければ。あの子から、呆れられるわよ」

からかうようにローザが言う。

シュテラにとっては、おじさまでも長い時間生きてきた竜ローザにとって彼は子供同然で、彼女は彼を「あの子」と呼ぶ。

まだ名前を呼ぶには若すぎ力もないと彼に言っていたのを、シュテラは聞いていた。

そしてローザが親しげに「あの子」と呼ぶのは彼だけだ。

だからシュテラもそれが誰だか直ぐ判る。

「今は、それどころじゃないわよ。ローザ。こんな恰好じゃ、おじさまに会えない。準備しなくちゃ…」

後ろを向いてローザに叫ぶように答えながら、シュテラは廊下に出て走り出す。

数歩進んだ時、柔らかいものにぶつかり、受け止められた。

「痛っ…ごめんなさい…」

シュテラは反射的に謝罪した。

ぶつかった感触がシュテラの経験上、人であることは判っていたからだ。

神殿内で探していた護衛のおじさんとシュテラは思った。でもそれは違った。

「いつも元気だなあ。シュテラは」

暢気な声が頭上から降ってくる。懐かしい声に顔を上げると、大好きな人の顔が見える。

「おじさま！」

「その呼び方は止めなさい。僕の事は名前で…ザムゾンと呼ぶように言っていただろう。シュテラ様」

男性は困った表情でシュテラに言った。

彼がシュテラの待ち望んでいた、その人だった。

前編（後書き）

前後編の予定です。

## 中編（前書き）

ずいぶん永い間、更新できませんでした。  
申し訳ありません…そして、終わりませんでした。  
ごめんなさい！！次には終わります

ザムゾンの瞳はシュテラを慈しむ光に満ちあふれている。

体つきは記憶にある彼より少し小さくなっていているようだし、彼のまとう力の波動が少し変わった気はするが、彼女を見る瞳や彼の持つ根源的な存在感は変わらない。

変わったとすると、シュテラ自身も同じように変化している。

シュテラの持つ全ての能力を持って彼を観察したが、記憶の中の彼とは大きな違いは認められなかった。

何もどこも変わっていない。

別れた日のままのザムゾンである事を実感して、シュテラは安堵する。

嬉しくなってくる。

つつい頬が微笑みで緩みそうになる。

だがシュテラはそれを必死で抑え、険しい…怒っているように見える表情を作った。

出会い頭にザムゾンが口にした言葉は、彼女には聞き逃せない言葉だからだ。

シュテラは強い瞳でザムゾンを見つめると、口を開く。

「おじさま。その呼び方はイヤ。止めて！」

キツパリと言い切った。

「…そういう訳にはいかないよ」

ザムゾンは困った顔のまま、微かに笑みの気配を忍ばせ、シュテラの言葉をすぐさま否定する。

その様子は自分の言葉がまるで本意ではないようだ。多分、そんなのだろう。

「私の事、シュテラって呼んで。じゃなきゃ。ダメ」

シュテラがそう断言すると、ザムゾンは頬を緩ませた。瞳に溢れる愛情。

大切な子供を見るような瞳でザムゾンはシュテラを見つめた後、気まずそうに目を逸らした。

「本当ならば、僕は君に会える身分じゃないんだ。こんな風に気軽に話す事もいけない事なんだよ。突然全部は出来ないだろう。だから段階を踏んで……」

まるで自分に言い聞かせるようにザムゾンは呟いた。

「身分が何よ！」

ザムゾンの言葉を遮るように、シュテラは叫んだ。

一歩も譲らない意思表示。

拒否せず受け入れたら、彼は少しずつ自分との距離を広げていくだろう。

身分が違う。

それだけの理由で。シュテラから離れていく。

いつか手の届かない遥か遠くまで彼が行ってしまえばいい。

その不安を吹き飛ばすように、自分自身に言い聞かせるように、

シュテラは頑なな態度を取った。

自分さえ折れなければ、多分ザムゾンは離れていかない。

彼が本心からそれを望んでいる訳ではないはず。

自分の傍を離れたい訳じゃないはず。

シュテラはその事を確信していた。

頑なな態度を取った時の彼は、いつも困った顔をしながら何処かしら嬉しそうだからだ。

そしてそれは今もそう。

シュテラは駄々をこねる子供のようにふくれっ面をした。

屋敷の誰にも見せない顔で言葉を繋ぐ。

「おじさまは、私が赤ん坊の頃から私の世話をしてくれて、私のことをよく知ってくれている……えーっと。あの……ほら、乳母みたいなものでしょう？ 貴族にはよくある事だって言われたわ。母君がご多

忙だつたりお体が弱かつたりしたら、平民から乳母をお願いするのよ。乳母つてよくある事よね」

「確かに乳母はよくある制度だけど……」

「でしょ。それに乳母だつたら、成人してからも近くに住んでいる事もおかしくない。正式な場所に出れない事は仕方ないけど……でも、一緒の屋敷に住まう事は何もおかしな事じゃないわよ。ねえ……おじさま。違うかしら？」

「乳母……か。シュテラが赤ちゃんの頃から世話をしたのは確かだし、やってた事を考えれば同じ事だが……」

「でしょう。そうでしょ？」

ザムゾンがシュテラの言葉に絆されてきたのを感じ、シュテラは表情を柔らかくして甘えるように上目使いに見る。

「まあね。僕がやってきた事は、そうとも言えるな」

「ねえ。だから、二人だけの時はいいでしょう？むかし通りでも」

「驚いたな……ずいぶんと賢くなった。僕の降参だ。君の言う通りだよ。シュテラ」

とうとうザムゾンは諦めたような困った笑いをして彼女の名を呼んだ。

「おいで。シュテラ」

ザムゾンが腕を広げる。

受け止めてくれる大きな手の前で、シュテラも精一杯小さな腕を広げてザムゾンに抱きついた。

「おじさま……おかえりなさい」

どう返事されるか試すようにシュテラは言った。囁くように告げた言葉は震えていた。

さつきまで強気だったが、今のはちょっと自身がない。自分にとって彼は家族同然で、他には家族と思える人はいないが、ザムゾンは違うからだ。

元々街で暮らしていたし、新しい家族を外に作った可能性も無いとは言えない。

「ただいま。シュテラ」

不安の渦巻くシュテラの頭上から、柔らかいザムゾンの声が降り注ぐ。

広い胸はシュテラを包み込み心の底まで温めていく。

この腕が近くにある。心も以前と同じように傍にいる。それだけでシュテラは満足だった。

無意識のうちに、シュテラの目元からじわりと涙がにじんできた。慌てて止めようとしたが、水滴はシュテラの意思に反して止まってはくれないどころか、堰をきったかのように流れてくる。

泣いている事を知られたくなくて、こんな姿を見られたくなくて、シュテラはザムゾンの胸：体格差から、やや下の腹部に近い部分だ。が：に咄嗟に顔を押し付けた。

「どうかしたの？シュテラ」

無用な心配をさせたくなくてシュテラは努めて明るい声を出した。

「ううん。何でもないの」

だが、返事をする声は濡れていて、泣いている事は明白だ。

「シュテラ……」

戸惑うようにザムゾンは名前を呼び何かを言いかけ口を開いたが、小さくため息をつくと言いでシュテラの頭から背中を撫ではじめた。

二人とも言いたい事も聞きたい事も沢山あった。だけど、今は言葉は必要なかった。

シュテラの目から涙が枯れるまで、ザムゾンは彼女を慰撫するよ。うに撫で続けた。

「二人とも私の事忘れてるわよ」

麗らかな声が天井から降ってくる。

ザムゾンが声のした方向を向くと、小さな竜：ローザが翼を羽ばたかせ、シュテラの肩にふわりと留まる。ザムゾンと真っ直ぐ顔を

つき合わせるような格好になり、ザムゾンはローザを見た瞬間、満面の笑みを浮べた。

「帰ってきても。私に挨拶ひとつもないのね。薄情だわ」

ザムゾンの笑顔を尻目にローザは皮肉を口にする。

鱗に覆われた敵つい顔や、心を見透かすような赤い妖しい瞳は、見た事の無い者には異形の存在でしかないが、ザムゾンとシュテラにとっては見慣れて家族同然の存在だ。

黙っていれば宝物殿にある彫刻のような、作り物めいた姿形も、しゃべり始めれば豊かな感情と表現力を持っている事も判っている。だから機嫌を損ねると、元に戻すのも難しいと充分判っている。

ザムゾンは慌てた表情をして、口を開いた。

「そんな事ないですよ。ちょっと緊急事態だっただけです」

「見ていれば判るけれどね」

ローザはザムゾンの顔を見て楽しそうに言った。

本気で気分を害したのではなく、からかわれたただだと知って、ザムゾンは大きいため息をつき肩を落とした。

「相変わらず、手厳しい」

「これは意地悪よ」

「どうして、また？」

「判っているでしょう。シュテラに寂しい思いをさせているから」  
ローザがそういうと、俯いたままのシュテラの体がピクツと動いた。

ザムゾンもローザもシュテラの方を見たが、ローザは何も見なかったような様子で続ける。

「ホントは、もっとヒドイ意地悪をしたい気分でいっぱいなのだけども、それはシュテラが嫌がるだろうから。これくらいで許してあげるわ」

「僕が不甲斐ないばかりに苦労をかけます。申し訳ない」

ザムゾンはシュテラをチラチラと見ながら、大人しく謝った。

「あなたに甲斐性があるとは思っていないけどね。…この娘、あな

たが居ない間、ひとりですごく頑張ったの。それだけは言っておきたくて」

ローザが楽しそうに告げると、シュテラが突然顔を上げた。

肩に留まるローザを顔を真っ赤にして怒った瞳で射るように見る。

「ローザ！余計なこと言わないで」

瞳は潤んだままで、瞼には細かい水滴がついた状態で睨んでみたところで可愛いだけだが、シュテラ自身はそんな事はお構いなしで言い切った。

「まあ…シュテラったら強がりばかり」

「ローザ！」

ローザが茶化すように言うと、シュテラは尖った声を上げた。

「まあまあ。シュテラ。ローザ。落ち着いて。判ってます。シュテラが頑張っている事は…ここに来るまでに、調停者殿とも話しましたし…シュテラが立派な態度で生活しているって聞いてます。偉かったね。シュテラ」

「おじさま」

ザムゾンが褒めるとシュテラ怒った顔は瞬時に柔らかくなる。

「それもこれも、あなたと一緒にいたいからなのよね。次の調停者になるのでしょうか。勉強は進んでいるのかしら？」

嬉しそうな顔をしたシュテラの横でローザが問いただすように言った。過去ザムゾンがその可能性を口にした事はある。

出自には関係なく能力だけが問われ、そうなれば『唄う鳥』と一緒にいなければならぬ職業だ。

そして調停者であるという事、それがどんな高位の貴族よりも尊まれる。

『唄う鳥』と同じく国の要という位置づけをされている。皇帝や皇太子のその下に配される。

だが、ザムゾンの有する能力は高くはなく、調停者ほどの術者になるためにはかなりの困難が予想された。

シュテラとしては、ただ彼と一緒にいられば良かった。

だから、そんななれるかなれないか判らないものよりも、彼である事が傍にいる意味になる「育ての親」…乳母という理由の方が簡単のようにも思えたのだ。

シュテラの考えを立証するかのようになり、ザムゾンは視線をさまよわせる。

「それは…えーっと…まだ…」

「ダメね。そんな事じゃ。待ちくたびれてしまうわ」

嘲笑うようにローザが言う。その言い方にはシュテラがカチンときた。

「ローザ。私そんな事、思っていない」

怒った声でシュテラが言うと、楽しそうにローザが返した。

「思ってもいないの？」

「……う」

ローザに真つ直ぐ聞かれると困る。

思っていないと言ってはみたものの、本心では思っている。

でも大好きな彼を苛められるのは嫌なのも確かだ。

「我がまま言っちゃダメなんだからね。おじさまを困らせるローザは嫌い」

「そう。じゃ…」

ローザは冷たく返すと、翼を広げ飛び上がる。

「私はシュテラから嫌われたから、この子の肩に乗るわね。いいでしょ」

優美な動きでザムゾンの肩に飛び乗る。

あんなに責められ苛められたのに、ザムゾンは嫌な顔ひとつせず、瞳に誇らしげな色を浮べ、嬉しそうに微笑んだ。

「それは…まあ…」

ザムゾンを庇ったシュテラだけが浮いた形になる。仲間はずれにされたような気になり、シュテラの感情は頂点に達した。

「おじさまも嫌い」

シュテラはザムゾンの体を強く押し、距離を置く。踵を返してそ

のまま走り出しそうになる。

背中を向けたシュテラの腕をザムゾンは掴んだ。

「シュテラ。嫌わないで。嫌われたら、僕かなしいよ」

ザムゾンの哀しそうな声を聞いて、シュテラは立ち止まる。

「かなしい？」

「うん。哀しい。許してくれないかな？」

「許さない訳じゃないけれど……」

「あっちへ行こうか。ゆっくり話そう」

「……うん」

ザムゾンはシュテラの手をしっかりと握って歩き出した。シュテラもそれに従う。

部屋の奥へとザムゾンは進んだ。

ザムゾンは窓の前に肩に担いでいた荷物を置き、シュテラが外を見るために持ってきた椅子に座ると、シュテラを抱き上げ向かい合わせに膝に乗せる。

ザムゾンの肩にはローザが乗ったまま。

シュテラが見上げるとザムゾンの顔とローザの姿が目に入った。

待ちかねていた時間が訪れていた事に、ふと気がつく。

家族がそろった。それを改めて実感する。

仕切りなおしでも言うかのように、ザムゾンは表情を改めると笑顔を浮かべる。

そしてシュテラの望んでいた言葉を告げた。

「独りにしてゴメンね。色々いっぱい我慢しただろう。シュテラが良い子でいて、僕は嬉しいよ。しばらく滞在出来るから、いっぱい話そう。いっぱい遊ぼう」

## 中編（後書き）

大変ながく更新を休んでいてすみません！！！！

年末からしばらく忙しかつたのもありますが、今まであまりにも考えずに書いてたなあ〜と反省して、今後の展開で悩んでいました。

なかなかまとまらず時間だけが経って、悩んだ割りに出来はよくありませんが…

今後はもう少し悩むクセをつけて行こうと思います。

## 後編

シュテラはザムゾンの胸に腕を回して、キュツと抱き締めた。

「うれしい…おじさま」

前は腕を精一杯伸ばしても腹部に引つかかっているだけだったのに、今は背中に回っている。

ザムゾンの手もシュテラを強く抱き締めた。

彼の男性としては細いがシュテラにとっては頼りがいのある強い腕と、背中に暖かい掌を感じる。

温もりは背中から体全体に浸透し、心の奥底まで暖めてくれる。

シュテラは無意識のうちに緊張していた事に気がつき、体から力を抜く。

やっといつもに戻れた。

安心のため息をつきながら思ったシュテラだったが、ふと何かが違うと感じた。

顔を上げて彼を見つめる。

向かい合わせで座るとザムゾンの顎のところまでシュテラの頭が来ている。

この前会った時には、まだ胸のところくらいまでだった。

…私。大きくなっている。

その位置を確認して、違和感の正体が判った。

言葉では大きくなったと言っていたが、今まで実感が沸かなかつた。

自分の成長を改めて感じて、シュテラは嬉しくなった。

大きくなって正しく力を持てば、ザムゾンと過ごす時間を自分の意思で増やす事も可能だろう。

そう信じ、それを望みに日々を励んでいる。

以前のように、一緒に暮らすには自分はどんな人になればいいの

か。幼いながら常に考えながら生きてきた。

もちろん、幼さ故にやってはいけない事も我慢できない事もあったのだが。彼女の年齢にしては、かなり頑張っている。

…でも。今は忘れる。

シユテラは思った。

…おじさまは、私の傍にいる。

これがシユテラの望んだ全てだ。

この幸福の時間に水を差す様なことを考えたくなかった。

離れている間、いろんな事があった。たくさん学び、自分なりに知識を重ねてきた。

中には悩んで迷い答えの出ないこともある。彼の意見を聞きたいとずっと思っている事がある。

でも、甘える事が許されるなら、そんな難しい事など考えず、今は楽しく過ごすことだけを今は考えたい。

楽しい時間を過ごしたとしても、それは永遠ではないし。

別れの間際には、また再び考え始めなければならぬと判っているから。

シユテラがザムゾンの胸にひつついたまま、まずは、どんな楽しい事を話そうかしら…と考えていると、聞きなれた尖った声が降ってきた。

「それで…私への挨拶はどうなったのかしら？」

ローザが不機嫌さを隠さずに言った。

空気がピリツと緊張を帯びる。

…あ・忘れていた。

慌ててシユテラはどう謝ろうかと考えた。

シユテラはローザと繋がった部分があるので、詳細は伝わらなくても、どんな気持ちであるのかは筒抜けだ。

だから、言い訳をしようと思った事も筒抜けなのだが、彼女の存在をないがしろにしたことが問題なのだ。

心を尽くして言葉にする大切さをローザは常々口に出しているから、

シュテラは自分の精一杯で考え始めた。

ザムゾンが顔を動かす気配がした。シュテラは顔を上げ、二名を見た。

「嗚呼。そうでした」

緊張感の無い、のほほんとした声でザムゾンが今思い出したかのような声で返事をする。

「ただいま帰りました。ローザ。相変わらず貴方のステキなお姿を拝見できて光栄です」

「本当にそう思っているのかしら？」

「勿論。僕の気持ちに嘘偽りはありません。そのお力も健在ですね。お元氣そうでなによりです」

ザムゾンが心を込めて挨拶をすると、ローザは鷹揚に頷いた。

「それから…僕の居ない間、シュテラを護って下さってありがとうございました」

「おかえりなさい。ザムゾン。『唄う鳥』を護る事は自らに課した役目だから、礼は不要よ」

ザムゾンの方に留まったまま、ツンと顔を背ける。

距離を置く事はない。

本気で怒ったから、術を使って消える事は…二人には姿を見えないようにする事は簡単だ。

なのに文句を言うだけで、離れることはない。

その距離感でローザの怒りは形ばかりだと判る。二人の世界に入ってしまったって、仲間はずれにされた事に拗ねているのだと、誰にでも判る素振りだった。

「まあまあ、そう機嫌を損ねないでください。あなたから冷たくされると、僕は哀しいですよ」

ザムゾンがそう言うと、ローザはまんざらでもない顔をする。

「それに僕はシュテラの育ての親…乳母みたいなものですから…この子の成長を見守る保護者としての礼ですよ」

ザムゾンの言葉を聞いて、シュテラは目を瞠った。

さつきシュテラが言った言葉を使って自分達の間係を説明する。彼と心が通じている証のようで嬉しくなる。

輝く笑顔でザムゾンを見つめると、その視線に気がついたように、ザムゾンはチラと目配せをする。

「そう…判ったわ。なら、言い心がけとして。その言葉受け取っておきましょう」

年長者の威厳を感じる声でやや横柄にローザは言う。

続けて、口調を柔らかくすると機嫌を直したような口ぶりで問いかけた。

「それにしても、ずいぶん永い不在だったわね」

「それを言われると、辛いですね。もう少し早く帰ってきたかったです…色々とありまして…」

ザムゾンは困った顔をして言った。

最後の方は何でもハツキリと言う彼にしては珍しく言いにくそうにする。

そんなザムゾンを見てローザは禍々しさを含んだ笑顔で笑った。

…ローザ？

全身を不安が駆け抜けた。

見たことの無い表情でローザが笑った。理由がそれだけでも充分だ。

何故か遠い手の届かない場所にいるように感じた。

心や体の奥深い部分でひとつになっっている筈なのに。一瞬。こんなに近くににいるのに。

口の端から見える鋭利な牙がシュテラの心を不安にさせる。

「色々あったのは判るわ。随分と魔力が強くなったわね。以前とは見違えるくらい強い術者になった。あなたも良く頑張りましたね」

「判りますか」

褒められてザムゾンの顔が明るくなる。

喜ぶザムゾンの顔をローザはやや冷たい瞳で見つめ返した。

「そうね。あなたが…あの術に…禁術に手を染めたって事位までは

判るわ」

朗らかに見せかけた硬い声でローザは言い、彼女の言葉を聞いていたザムゾンの表情が一瞬で闇をまとう。始めてみる彼の表情。

ローザどころかザムゾンまでも、遠くに行ってしまうような不安感に襲われ、シュテラはたまたまらず会話に割り込む。

「…きん…じゅつ…って、なに？」

「ローザ！」

シュテラが聞いていると気がつかなかったのが、ザムゾンがハツとした顔をし咎めるようにローザの名を呼んだ。

「どうしたの。声を荒げたりして」

ザムゾンの尖った声を平然と聞き流し、ローザは返答した。

「シュテラの前で変な事言わないで下さい。僕の使った術は禁じられてるものではありませんよ」

きつぱりとザムゾンは言いきつたのだが、その表情は暗いままだった。

「あら、そうだったかしら？」

「ええ。あの場所では許されています」

「なるほど。そう、あそこまで行って来たのね。それは長旅だわ」

「僕にとつては、色んな意味で長い永い旅でした」

「そうかもね」

ローザの言葉にザムゾンが、しみじみと返す。二人とも、その場所のことを知っているようだ。

それもあまり良い意味では無さそうだ。

シュテラはいつのまにか自分だけが仲間外れになったような気がした。

ザムゾンを服ごと揺さぶると、声を上げる。

「どこまで、行ってたの？」

ザムゾンとローザが、今思い出したようにシュテラを見つめ、顔を綻ばせた。

暗い空気が一瞬で消え去ってしまう。

「ずっとずっと遠くだよ」

「シユテラが待ちくたびれるくらいね」

二名はシユテラに柔らかく言葉を返した。

自分の存在がこの場を明るくした。その事実がシユテラを勇気づける。

「待ちくたびれてないもん。ちょっと、寂しかったただけだもん。遠いって…どれくらい」

「シユテラが心を飛ばせる距離の十倍くらいかな」

「そんなに遠く？」

「そうだよ。でもアナトールならそれくらいの距離、簡単に飛ばせただね」

ザムゾンは少し遠い目をして、言った。

アナトール。その名前はシユテラの父親の名前だ。

「父様？」

「そうだよ」

「スゴいのね」

「アナトールはスゴイ術者だった。それにとても優しい人だったんだ。憶えているだろう」

ひとつひとつを噛み締めるように言う。

ザムゾンの言葉で、シユテラの脳裏を寡黙だけど優しく病弱な男性の姿が浮かび上がった。

他の人がどう言おうとシユテラにとっての父親の姿はそれだ。だがシユテラやザムゾン以外の人には違う。

「うん。憶えている。でも…」

シユテラは答えた。他の人が父のことをどう見ているのか、ザムゾンに言おうかどうか迷った。言ったらザムゾンが悲しむかも知れないと思う。でも言ってしまった。

この前ザムゾンと再会した時には、父に対する神殿の人の複雑な気持ちを感じても、どう表現していいのか判らなかつた。自分の感じ方と他の人の感じ方に、違いがあるという事だけしか判らなかつた。

た。だが、今はその気持ちがどういうものなのか判っている。ザムゾンの不在の間にシュテラは人の心の複雑さを理解できるほど成長していた。

だから、今までは悩まなかった事が悩みことになる。ローザには事あるごとに相談したが、「『唄う鳥』という異質な存在は、人には理解できないのよ」とか何とか言っただけで答えにならない答えしか出してくれなかった。

知識は教えてくれるが、人としての考え方は教えてくれない。

沢山の人の人生を見てきただろうから。もつと色々な人生について話してくれてもいいと思うのだが、ローザは子供にはまだ早いと父を含めて歴代の『唄う鳥』…シュテラの先祖に当たる人たちの話もあまりしてくれない。

それに、そもそも竜が人間の社会に関して理解できるかと言えば無理だろう。

人としての悩みを吐き出しても「人は大変ね。私はそうは思わないけれど…」と返されて終りだ。

だからこういう事はザムゾンにしか相談できない。言いたくてもじもじしているとシュテラの言葉をザムゾンが促した。

「でも？」

「でもね。他の人には父様…優しくなかったみたい」

「そんな事ないよ。優しくかった。この国民、みんながどうしたら幸せになれるか、悩み考えた優しい人だった」

ザムゾンが力強く言っただけで、シュテラは納得できなかった。他の人が考えるアナトール像は全く違う。

「でもでも…神殿を何度も焼いたって聞いた。神殿の人が何人も死んだり怪我したって聞いたわ。それは嘘なの」

「それは本当の事だ」

「じゃあ…」

「シュテラ。よく聞いて。アナトールがこの国の人を害したからと言って、彼が優しくなかったわけじゃない。彼はこの国の国民を救

うために、そんな風になってしまったんだ」

「それって、どういう事？」

ザムゾンの言うことの意味が判らない。

シュテラが首を傾げると、ザムゾンは沈黙して少し考えるような瞳をした後、慎重に口を開く。

「隣の国と戦争をしていた事は知っているよね」

「うん。歴史で習った。11年前に休戦協定を結んだって」

「その前の事は？」

「えつとね。たくさん戦いがあつたの……」

ザムゾンの話したい事は判らなかつたが、シュテラは歴史の勉強をした成果を見せるチャンスとばかりに話はじめた。

彼女は暗記が得意だ。年表と戦いの名前とその場所。

「そうだね。スゴいなシュテラ」

勉強の成果を知って、ザムゾンは素直に賞賛の言葉を述べた。彼の言葉はシュテラの心を輝かせる。

「いっぱいいっぱい勉強したのよ」

「ホントに偉い子だ」

ザムゾンはご褒美というかのようにシュテラの頭を撫で、シュテラは気持ち良さそうに目を細めた。

「じゃあ。話やすいな。休戦協定をこの国に有利な条件で結べたのは、この国が強かつたからだ。だけど、その強さはたった一人のお陰でもある」

「たった一人……って。父様？」

「そうだよ。シュテラ。彼が戦場に立つ前は、戦況ははかばかしくなかつた。かの国は魔術の先進国だからね。戦場で苦戦を強いられただばかりか、国内も混乱していた。そんな中で状況を覆したのが、アナートルだ」

ザムゾンは誇らしげに言葉を続けた。

「彼はローズと繋がり、竜の力を自在に操れる。シュテラ。君も訓練すれば、ローズの力を使えるようになる筈だ。伝説だけでなく、

一夜にして国全体を焦土と化す力。だが、君にもうひとつの力が備わっている」

「もうひとつの力？」

「ああ。これは、本来の君の一族が持っている力…心を読む能力だ」

「心を読む能力？」

「そうだよ。シュテラは何度も経験しただろう。言葉に出さなくても、相手の思ったことが自分に伝わってくる感覚」

「……うん」

「アナトールはね。その力も強すぎた。彼は戦場に立っていても、敵・味方、どちらとも心が気持ちが悪く伝わってしまうんだ。君には戦争というのが、どういうものなのか判らないと思うけれど…戦地は戦わなければ殺されてしまう場所だ。彼は戦うために…戦に勝つために自分自身に術をかけた」

「術？どんな？」

「人の事など構わず、周囲一体を焼き尽くす。人間兵器になってしまふ術だ。戦場では敵の只中に入ること味方に犠牲は出さなかったが…戦争は続いていても、四六時中戦っているわけではない。神殿に戻る必要もあつた。彼には国の神事があつたからね。だから、不安を抱えながらも神殿に戻り、神殿に戻っている間はその力が出ないように、何重にも封じの術で封じていた。でも、封じの術は完璧じゃない。僅かな亀裂でも入れば、彼は暴走した。『調停者』の持つ、自分の命を力に変えて封じの術くらい強力な術ならば押さえ込めるけど。その封じの術を使うと有能な術者の『調停者』が一人亡くなり、『唄う鳥』は封じの術が解かれるまで、自分では全く術が使えなくなる。ほとんどの魔力が使えなくなる。天候の予言も、危機の回避も無理だ。災害や病が大きくならないように、防ぐ事もできなくなつてた。あの時、彼の不在は色々と不便なことを招くことだつたんだ。この国がどれだけ『唄う鳥』に依存していたのかよく判るよ」

「でも…今は…私そんなにお仕事してないよ」

シュテラの行っている事は月に一度、神殿内で行われる天候の予言と、祭りの際に国内で起こることの託宣だけだ。

他は神殿のトップにいる神官達が様々な魔法のスペシャリストだから、彼らに任せておけばよいことになっている。

「ああ。そうだね。今はほぼ元通りになっている。アナトールが元に戻した。『唄う鳥』は元は、託宣以外の神事に関わっていないかった。で三十年前に流行り病が国の中で猛威を振るって、術を使える人が激減したため、アナトールがひとりでもするようになったんだ。『唄う鳥』は竜に繋がりが、不死の力を有する。絶対に死なない人に大事な事をお願いしておけば、国からは失われないだろうってわけ。託した時はみな必死で、それしか選択肢がなかったのかも知れないけれど。平和になってからも、ずっと彼ひとりに色んな事を押し付けていたのは間違いだった」

怒った声でザムゾンが言った。その声にシュテラは驚く。温厚で優しい彼の顔しか見てなかったからだ。だけど、その言葉でザムゾンがどれだけシュテラの父を理解し大切に思っていたのか判る。

ザムゾンの言葉の全てをシュテラは理解できなかったが、相応の理由があつて父は危ない力を手に入れ、それによる事故を何回も起こしたという事は判った。

「アナトールが起こした大きな暴走は三度。三回、神殿内部は丸焼けになったという訳。そして、調停者も三回替わった」

切ない瞳をしてザムゾンが言葉を続ける。

「休戦調停を結んで、和平協定による平和が訪れて。もう大規模戦闘が行われなくなったと確信した時、彼は一番確実な方法でその力を封じたんだ」

「一番確実な方法？」

「どうしたと思う？」

「わかんない」

「『唄う鳥』そのものの力を手放したんだ」

「『唄う鳥』の力……」

「自分では、平和な世界を築けないとアナトールは思っていた。戦争しか知らないし。戦の中でしか生きられなかった。彼は戦時下に生まれ、人生の半分を戦場で過ごしたんだ。いつか来る平和を夢見て。だから未来に力を託した」

「それって…私？」

「そう。シュテラ。君にその力を渡した。君はアナトールと同じ道を歩いてはいけない。彼とは違った『唄う鳥』にならなければならぬ。判るかな？」

突然、自分の事を言われ、シュテラはビックリする。父のおかれた状況も違えば、今の時点でやっている事も異なっている。アナトールと同じ『唄う鳥』にはなれないことは明白だが、ザムゾンがこのままの自分で良いと言っているのか判らない。

いや。話の流れで考えると父から未来を託されたシュテラは、彼の希望に沿うような働きをしなければならぬという事だ。

ザムゾンの言葉は偉業を果たさなくてはならないと言われているように聞え、シュテラは困った顔をした。

「何だか難しそう」

「そんな事ない。簡単だ」

「かんだん…なの？」

「ああ。シュテラ。アナトールのことを思い出してご覧。彼はシュテラにどうして欲しいと言ってた？」

「わかんない。だって父様、私に出来ることしか言わなかったもん」

「それでいいんだ。シュテラの父様はシュテラに毎日どう過ごささいって言った」

「…毎日、元気で楽しく過ごささいって言った。みんなと楽しく過ごせるには、どうすればいいか考えなさいって」

「ちゃんと憶えているじゃないか」

「でも…そんな事。『唄う鳥』じゃなくても出来る。私には私だけにしか出来ない事があるんでしょう。それがこれだって思えない」  
「すぐに判るようになる。そのまま真っ直ぐ伸びていけばいいんだ。」

君の望みが夢が、この国の未来を作る」

「私の夢……」

話をしながら、シュテラは自分の夢を思い出した。

「あのね。私、夢があるの」

シュテラが言うのとザムゾンは嬉しそうな顔をした。そっか。こんな事でいいの。自分は自分のままで、ありのままの自分でいいの。シュテラはそう感じ、どんどん元気になっていく。

「どんな事？」

「旅に出たいの。この神殿から出て色んな人に出会って色んな場所に行きたい。おじさまが話してくれた、外の街のお菓子や料理…屋台の料理も食べたいし…野宿もしてみたい。おじさまとローザと一緒に」

シュテラは、チラリと上目使いにザムゾンを見た。シュテラが望んでいるのは、平民と同じように旅をする事なのだが、それは彼女にとっては難しい事だ。子供だという事もあるが、大切に護られ、ほとんど神殿の外に出る事すら難しいのだ。これから状況が劇的に変化するのは今のシュテラには思えなかった。だけど。夢を諦めることも出来ない。

「……無理だと思っ？」

尋ねるとザムゾンは首を横に振った。

「いや…そんな事ないよ。実現させるにはかなりの苦勞と努力が必要だけど、シュテラがそうしたいってずっと思っていたら、きっと叶う」

「ほんとうに？」

「本当だとも。ローザもいいだろう」

「まあ…旅くらいなら、いつでも直ぐにでも私が出してあげていいわよ」

楽しそうにローザが言うと、ザムゾンは慌てた。

「ローザ。力押しで勝手に出ていく事は勧めないで下さい。僕は正攻法で、周囲に認められた状態で、シュテラを旅に出してあげたい

んです」

「そう。なら、貴方達で頑張ることね。私はこの成り行きを観察することにするわ」

少し呆れたようにローザが告げると、ザムゾンはあからさまにホツとした顔をした。

「ええ。ありがとうございます。シュテラ。僕と一緒に夢を叶えよう」

彼が言うのならば確実だ。心強い援軍を得てシュテラの顔がこれ以上ないくらいに輝く。

「うん。ありがと。おじさま。いつか一緒に旅にでようね」

シュテラは約束というように、彼の胸にキュッとしがみついた。

家族の存在をしっかりと感じながら、シュテラはいつ叶うともない夢を、再び心に刻み付けた。

後編（後書き）

やっと終わりました！

長くかかってしまっって申し訳ありません！！！！

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

他の話はもう少しお待ちしないで、書きたいです（切望）

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6568p/>

---

【 夢見るカゴの鳥 】 唄う鳥・嘆く竜シリーズ（シュテラ編）

2011年2月25日15時25分発行